

1, 景観検討委員会の目的

1-1 事業概要、委員会の目的

今回行う補修事業の目的は、一般国道157号犀川大橋において、老朽化対策および延命化を図るものです。補修事業において景観上特に重要となる仕上げについて、防食皮膜の剥離が散見されるため、塗膜として耐久性が高く、現在鋼橋塗装に多く用いられているフッ素樹脂塗装での塗り替えを予定しています。

したがって、本検討委員会は塗り替えの色彩の選定を行うことを目的としています。

1-2 検討対象

- 1) 犀川大橋本体の色彩
- 2) その他必要な色彩変更等、景観配慮

橋梁付属物（高欄、舗装、照明等）は現状問題が発生していないため、再塗装等補修の対象ではありません。しかし、本検討委員会で色彩等変更しなければ著しく粗悪な景観となる可能性がある場合は、その都度検討することとします。

1-3 橋梁諸元（現況）

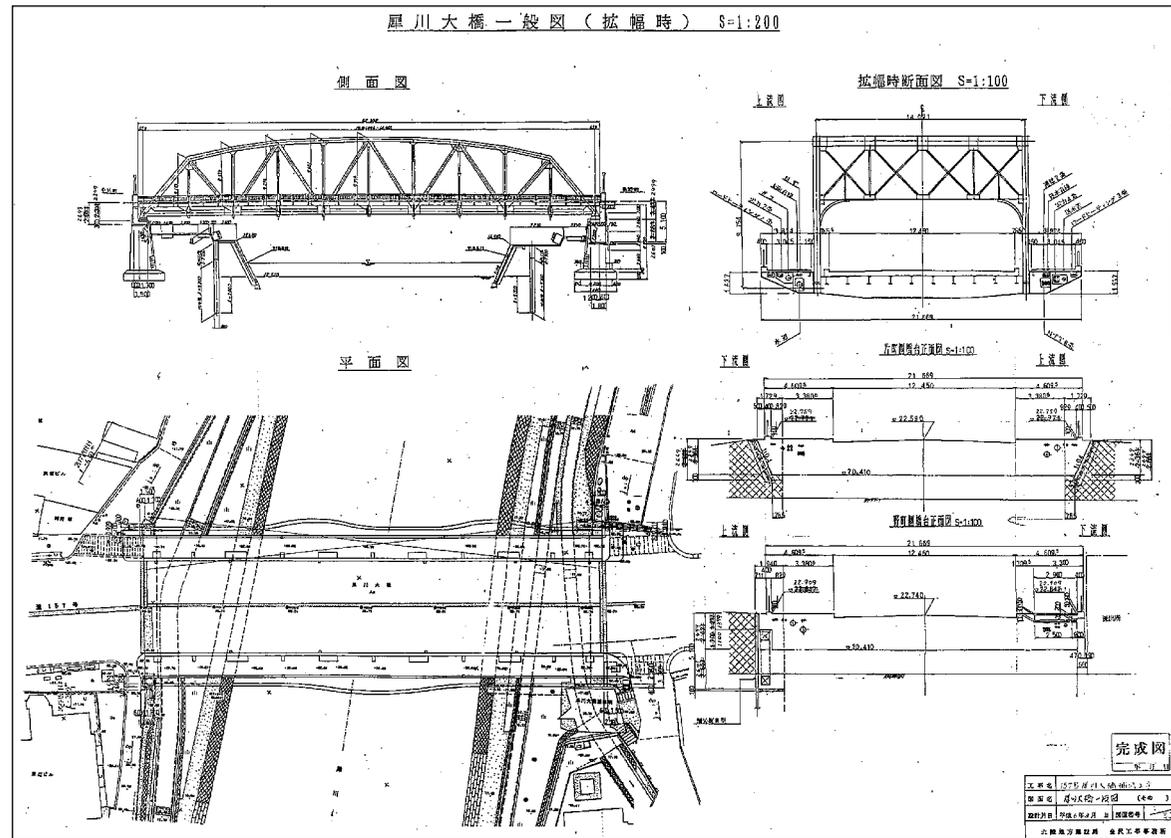
- 橋名：犀川大橋
- 架設：1924（大正13年） 築83年
- 橋長：62.308m
- 幅員：21.669 ~ 23.669m
- 上部構造：下路式単純曲弦ワーレントラス
- 下部構造：半重力式コンクリート橋台（直接基礎）
- 設計荷重：自動車荷重13t + 電車荷重32t（B活荷重対応）
- 特徴：日本最古のワーレントラスで国の登録有形文化財
照明はガス灯をイメージ、歩道は自然御影石
橋名版は架設当時の県知事が書いたもの、現在でも大切に使われている
これまで5色の色を身にまとい、現在は青系のグラデーション

登録有形文化財とは

平成8年10月1日に施行された文化財保護法の一部を改正する法律によって、保存及び活用についての措置が特に必要とされる文化建造物を、文部科学大臣が文化財登録原簿に登録する文化財登録制度が導入された。この登録制度は、近年国土開発、都市計画の進展、生活様式の変化等により、社会的評価を受けるまもなく消滅の危機に晒されている多種多様のかつ大量の近代の建造物を中心とする文化財建造物を中心とする文化財建造物を後世に広く継承していくため、届出制と指導・助言・勧告を基本とする緩やかな保護措置を講じる制度であり、従来の指定制度（重要なものを厳選し許可制等の強い規制と手厚い保護を行うもの）を補完するものである。

(<http://www.paw.hi-ho.ne.jp/tnkntanaka/cultural%20properties.htm> より抜粋)

犀川大橋は、本形式の道路橋としては、日本最古であることと、大きな戦火をまのがれ、今もなお市民に親しまれ続けていることから、保存価値が高いと言われています。



犀川大橋一般図



2, 検討対象の整理 ～架橋から現在まで～

2-1 形の変遷

犀川大橋は、加賀 100 万石の藩祖・前田利家が 1594 (文禄 3) 年に架けたのが最初と言われています。当時は木橋であり、暴れ川である犀川の大洪水にたびたび流されたようです。

その後、鉄筋コンクリートとして、当時「永久橋」として建設されました。しかし、1922 (大正 11) 年 8 月、金沢測候所開設以来最大の集中豪雨により、上流の橋が流失したことが起因となり、落橋という不幸に見舞われました。

そして関東大震災などの困難な時期を乗り越え、総工費 26 万 7,290 円を投じて 1924 (大正 13) 年に現在の犀川大橋の姿となりました。本橋の形式は「鋼下路式単純曲弦ワーレントラス橋」という由緒ある形で、全国的に知られています。



木橋時代

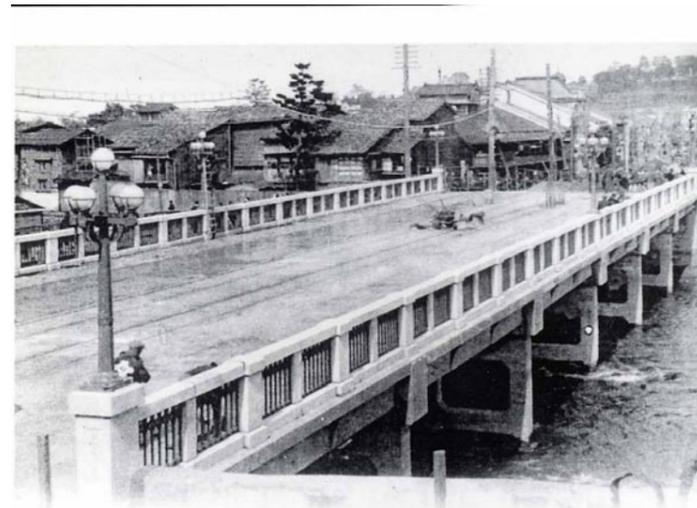
1594年(文禄3年)▶1918年(大正7年)

犀川大橋は、加賀藩祖・前田利家が文禄 3 年(1594年)に架けたのが最初で、利家が犀山町年寄あての文書に詳しく書かれている。当時の大橋は木造であるため、洪水ははんのたびに流されたり損傷をうけた。緊急の場合を除き農作業を妨げないため、真夏の間に備えるため秋の収穫後に修理を行った。また、大雨洪水で流されるたびに設けられる仮橋として舟橋をかけることが多く、橋の下流に舟を浮かべ、鎖を運搬大綱やカスガイで結び、水の増減に応じ伸縮自在にした。雇舟は 14.5 隻であった。

延宝金沢園(県立図書館蔵)によれば、当時の大橋は長さ 40 間、幅 3 間であり、城下唯一の大きさであったという。幕末の天保期は凶作が続き、生活困窮者が多かった。天保 8 年(1837年)藩主は大工等職人で困っているものの救済のため、痛みかけた大橋の架け替えに取りかかり、これに従事させ職を得させた。明治維新以後、第 1 回の架け替えは、明治 4 年(1871年)であり、橋長 35 間、幅 4 間であった。その後、老朽や水害により架け替えはあったが、木橋最後の架け替えは、明治 31 年(1898年)であった。



松尾芭蕉の句碑(犀川大橋上流左岸)
俳人・松尾芭蕉は、「奥の細道」の旅を終え、奥州より京への道中、金沢に立ち寄りました。芭蕉行記によれば、元禄 2 年(1695年)7 月 10 日晩滞在したことです。河原町(今の片町)の酒屋三竹屋に泊まり、多くの門人たちと俳句を詠み、犀川のほとりも散策したようです。この大橋も幾度も通ったことでしょう。金沢で詠んだ「あかあかと 日はつれなくも 秋の嵐の芭蕉の句碑は大橋のたもとにあり、県内外からここを訪れる人も多いようです。」

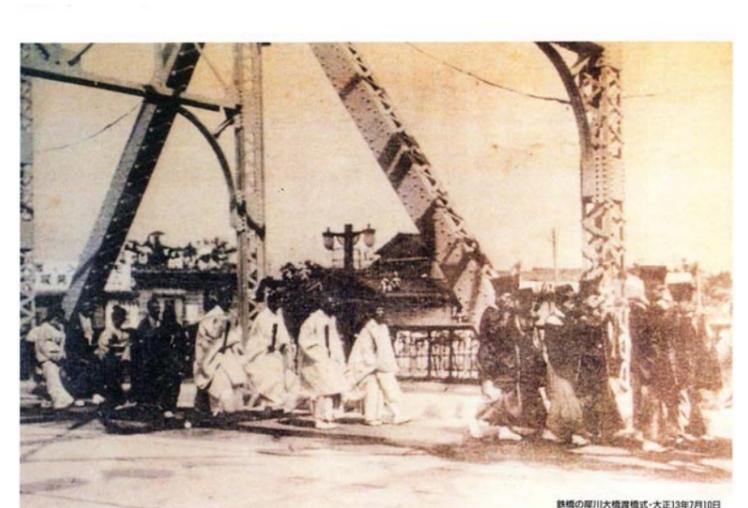


鉄筋コンクリート橋時代

1919年(大正8年)▶1922年(大正11年)

大正 8 年(1919年)に完成した犀川大橋は橋脚の多い鉄筋コンクリート製で、とってもしっかりとしたものであった。この橋は、それまで片町止まりだった市内電車をさらに寺町台地にまで延長するため、それ以前の木橋を取り壊し、一年余りかけて完成したものであった。

フランス・アンペック式鉄筋コンクリート桁 6 径間橋で、橋長 32 間、幅 8 間(軌道併用)であった。鉄筋は日本の八幡製鉄(現新日鉄)製であるが、一部は米国製でもあった。この最初の堅牢なる永久橋も、大正 11 年 8 月の金沢測候所(現気象台)開設以来の集中豪雨で、上流の大梁橋・上菊橋・桜橋が流失し、橋材・流木等でせきあげられたため、不幸にして落橋の悲運にあった。

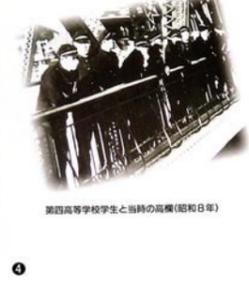


鉄橋時代

1924年(大正13年)▶現在

現在見られる犀川大橋は、橋脚のない橋で、工事中経済変動や関東大震災など種々の困難があったが、大正 12 年 5 月に総工費 26 万 7,290 円を投じて着工し、大正 13 年(1924年)3 月に完成したものである。

犀川大橋は東京帝国大学大学院を修了し米国学から帰って来た岡田篤樹(しげき)氏が設計した。英国製の鋼材を使用し、市電の荷重に耐えられるよう設計されているため、建設から 70 年経った今日でも約 3 万 8 千台/日の自動車交通に耐えている。専門的には鋼橋下路式単純曲弦ワーレントラス橋と呼ばれ、数多いわが国の鉄橋の歴史の中でも非常に由緒ある橋であると言われている。

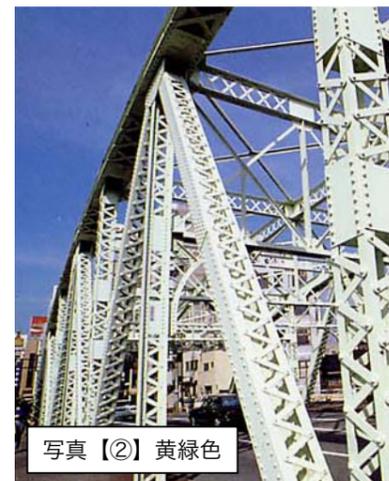


2-2 補修歴 (色彩の変遷)

- 1924 (大正 13) 年：竣工 (当時は「ネズミ色」との文献記載あり)
- 1957 (昭和 32) 年：横桁 11 本補修、床版補修
- 1958 (昭和 33) 年：石川県から建設省に管理を移管
- 1966 (昭和 41) 年：塗装 (薄いカーキ色)
- 1967 (昭和 42) 年：軌道撤去、オーバーレイ、モルタルによる床版補修
- 1969 (昭和 44) 年：載荷試験
- 1975 (昭和 50) 年：塗装 (白系クリーム色) ※右写真【①】
- 1976 (昭和 51) 年：河川改修に伴う橋台補修
- 1978 (昭和 53) 年：縦桁・排水桝取替、床版部分打換、鋼板接着、下構部ガセット部分取替
- 1984 (昭和 59) 年：塗装 (黄緑色) ※右写真【②】、載荷試験、鉛直材テンションバー設置、伸縮継手取替
- 1993 (平成 05) 年：塗装 (青灰色系グラデーション) ※右写真【③】
歩道部拡幅、垂直材・格点部補強、伸縮継手取替
- 1994 (平成 06) 年：舗装打換、パラペット拡幅、照明灯取替



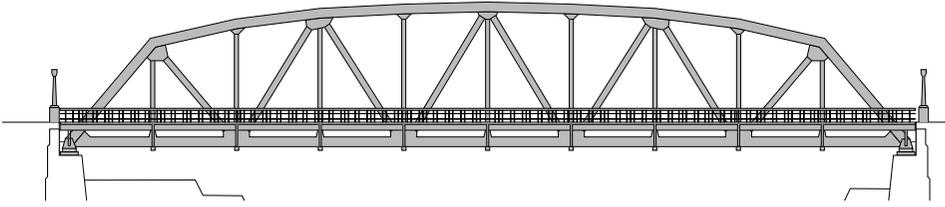
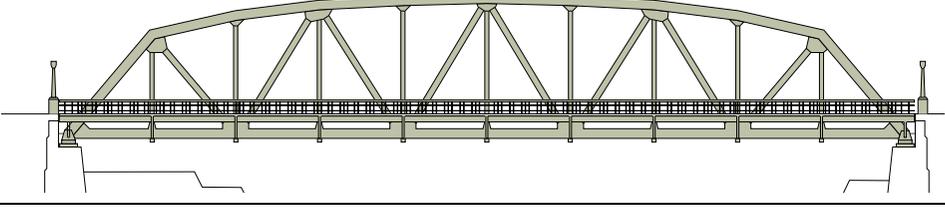
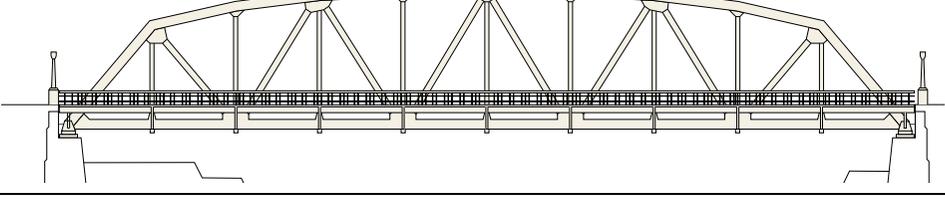
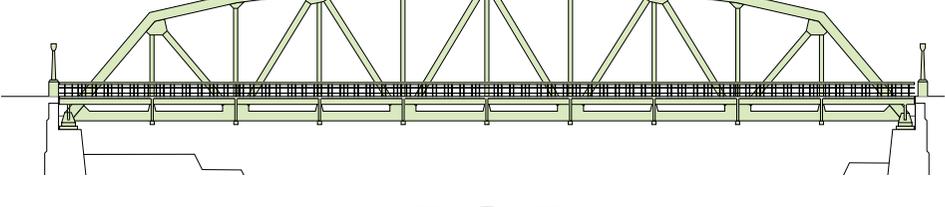
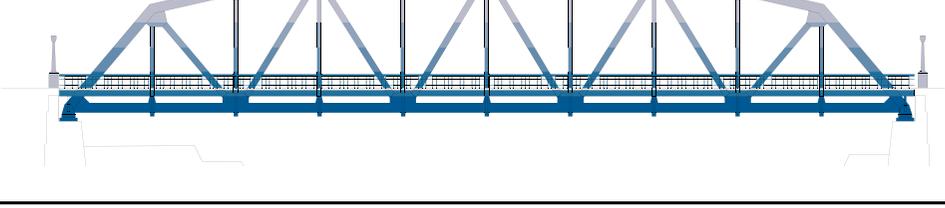
写真【①】白系クリーム色



写真【②】黄緑色



写真【③】青灰色系グラデーション

年代	色彩	参考スケッチ	決定経緯など
初期	<p>ネズミ色 詳細は不明</p> <p>参考として「素鼠色」にて表現</p>		不明
1966 昭和41年) ~ 1975 昭和50年 (9年間)	<p>薄いカーキ色 (詳細は不明)</p>		不明
1975 昭和50年 ~ 1984 昭和59年 (9年間)	<p>白系クリーム色</p>		不明
1984 昭和59年 ~ 1993 平成5年) (9年間)	<p>黄緑色 (5GY9/4)</p> <p>森の都・金沢を象徴 白、クリーム、茶系の 周辺建物を引き立てる。 雪の中でアクセントカラーに。</p>		<p>市民の声と専門家の助言を組み合わせた考え 方にて検討を実施しました。アンケート応募者 53人中、大半は明るいクリーム系(当時の現況 を希望したこともあり、森の緑と周辺環境との調 和をイメージし、浅萌黄(あさもえぎ)系の明る く柔らかな黄緑を採用しました。</p>
1993 平成5年) ~ 2008 平成20年) (14年間)	<p>青色グラデーション 上から) 10B7.5/1 10B6.5/2.5 10B5.5/4 10B4.5/6 10B3.5/8</p>		<p>加賀友禅のぼかし技法をイメージし、なまこ壁 の群青色を使ってアレンジした色調としました。 部材の多いトラス橋上において圧迫感を与える ので、上方を薄くすることにより、トラスの重た さのある程度解消する意図があります。</p>

1993（平成5）年開催 前回検討委員会結果

橋の塗り替え色彩は「青灰色系グラデーション」が採用されました。

デザインコンセプト

- 1) 橋と街並みの景観との関係が良好に保たれること
 - 2) 色彩デザインに金沢の雰囲気が明快に込められること
- 特に「2）」については、市民アンケートからも「シンボルとなる橋」を意識したいという気持ちが表れていた結果と同じ思想です。

色彩選定の具体的な配慮点

金沢らしさを表現するアクセントカラーとして日本の伝統色の中から「浅葱」「空」「納戸」などから青系を導き出し、加賀友禅に見られるグラデーションの配色法を試んでいます。具体的色彩は以下のとおりです。

その他検討結果

- ・歩道拡幅形状、舗装材材質についても検討されました。
- ・高欄、照明についても議論されました。

